

『ジュリアス・シーザー』の生身の英雄たち Mortal Heroes in *Julius Caesar*

野 口 孝 行
Yoshiyuki Noguchi

This paper argues that the heroes in Shakespeare's *Julius Caesar* are neither heroic giants nor mere political types but mortals of ordinary size, though it is a play about the assassination of one of the greatest men in the history, and accordingly includes a political problem of imperialism vs. republicanism.

シーザーの悲劇というと、彼の栄光と傲慢と野心、そして何よりも彼が最も寵愛をかけていたブルータスの裏切りによる最も悲劇的な死という結末を、我々は考える。「お前もか、ブルータス！」と言って倒れるシーザーの姿はあまりにも有名である。あるいは政治的な見方をすれば、独裁制と共和制の対立、共和派の陰謀が独裁制への野心を打ち砕く話ということにもなるだろう。シーザーが皇帝になる前に暗殺されたにもかかわらず、シーザーイズムとは皇帝政治を意味する言葉である。この言葉自体は20世紀に生まれたものだが、君主制か共和制かという問題はルネッサンス期の重大な関心事の一つでもあった。¹⁾ 歴史上あまりにも有名なこの人物を主人公にした悲劇ということで我々が思い描くのは、大体このようなことだろう。しかし、シェイクスピアの『ジュリアス・シーザー』は、こういった問題を主題として展開する劇ではない。また、シーザーが殺されてもこの劇は終わりにならず、後半では暗殺者たちの最期が悲劇的に描かれている。この歴史的な大事件を題材にした作品において、シェイクスピアの描こうとしたものは一体何だったのだろうか。

シーザーが栄光の頂点に達する直前で、最も信頼していた者に裏切られて殺されるという悲劇に向かって劇が展開して行くのであれば、彼の成功とそれを喜ばない者たちの反感の昂まりと共に、彼とブルータスの間の友情や信頼が十分に描かれていなければならないし、またブルータスも、シーザーへの友情とローマ市民としての義務との間で専ら葛藤し続けるはずである。しかしながら、人前では決して恐れている様子など見せようとしないうシーザーが、キャシアスに対して抱いている不安を打ち明け、「俺の右腕」と呼んでいるのはアントニーである。妻のキャルパーニアも、シーザーが元老院に行かないという伝言

を彼に頼もうと提案するし、暗殺の場面からトレポーニウスが連れ出しているのも、シーザーの死体を前にして涙を流すのも彼である。演壇での彼の言葉を詰まらせ目を真っ赤にしての涙には、民衆の気持ちを動かすための演技もいくらか含まれているのだろうが、暗殺者たちが去った後で、オクティヴィアスの召使の目に涙を見て、「悲しみは伝染するものらしいから、離れて泣いてくれ。お前の目に悲しみの滴を見て、俺の目も潤んできた」と言って流す彼の涙は純粋なものである。

Thy heart is big, get thee apart and weep.
Passion, I see, is catching, for mine eyes,
Seeing those beads of sorrow stand in thine,
Began to water. [Ⅲ. i ,282 - 285]²⁾

シーザーとアントニーの友情は十分に描かれているが、一方、シーザーとブルータスが本当に親密である場面はない。この二人が親密であることは、キャシアスとブルータスの台詞とアントニーの演説の中で触れられているだけである。

For Brutus, as you know, was Caesar's angel.
Judge, O you gods, how dearly Caesar loved him! [Ⅲ. ii ,172 - 173]

シーザー打倒に誘われてからのブルータスの悩みもまた、その本質は、シーザーとの友情と一ローマ市民として果たすべきだと感じている義務との間の葛藤とは少し違うように思われる。

It must be by his death. And for my part
I know no personal cause to spurn at him
But for the general. He would be crowned:
How that might change his nature, there's the question. [Ⅱ. i ,10 - 13]

彼には、民衆のため、即ち王冠を欲しがる者は必ず倒さなければならないという理由以外には、シーザーを攻撃する理由は何もない。たとえ今までのシーザーが良い人間に思えて

も、彼には、王冠を欲しがめる者が暴君にならない可能性など考えられないのである。ブルータスは決心が着かずにいるのではあるが、友情と義務との間で迷っているのではない。彼の場合、個人的な友情や義理や愛情がローマ人としての名誉や義務や誇りに勝ることは絶対にはないのであり、シーザーが皇帝になる野心を抱けば、彼を倒すべきか否かの結論は既に出ているのである。

結論が出ていても、たとえ友情が義務を妨げることがなく、名誉のためなら死をも厭わないというブルータスであっても、それを行動に移すのは容易なことではない。キャシアスにシーザーを倒せと唆されて以来、ブルータスには眠れぬ日が続く。

Since Cassius first did whet me against Caesar

I have not slept.

Between the acting of a dreadful thing

And the first motion, all the interim is

Like a phantasma or a hideous dream.

The genius and the mortal instruments

Are then in council, and the state of a man,

Like to a little kingdom, suffers then

The nature of an insurrection. [II . i ,61 - 69]

シーザー暗殺までのブルータスの心理とその表現をダンカン暗殺までのマクベスのものと比較したウィルソン・ナイトは、この悪夢のような心と肉体との内乱状態を、魔女たちに出会った直後、コードーの領主という魔女たちの二番目の呼び方が早くも現実のものになっていることを知ったときのマクベスの動揺と比べて、鮮明さと力強さと緊張の度合いはマクベスの独白の方が勝っているが、その性質は同じものであると言っている。³⁾ この場合、状況が違うのだから動揺の大きさが違うのはむしろ当然と言わなければならない。マクベスは王になる野心を抱いており、そのためにダンカンを殺すことに罪悪感を十分感じているが、ブルータスにはそのような個人的利害はなく、民衆のためになることだと信じているので、彼は罪悪感を感じるべきだとは思っていない。むしろ、自分をこの恐ろしい行動に駆り立てているのが正義感であるとさえ思っている。また、マクベスは一人で殺人を犯さなければならないだろうが、ブルータスには一緒に暗殺を行う仲間が何人かいる。

思い描く殺人の恐ろしさは当然段違いである。それでも、ウィルソン・ナイトの言うように、この二人の動揺の性質は非常によく似ている。ブルータスの心と肉体との内乱は、マクベスの、気持ちは殺人の方を向いているのに身体はその恐ろしさに震えている状態であり、彼らの決心を鈍らせているのは、友情や忠誠心などではないのである。

義理を感じている相手ではあるが、暴君になることは許せないというのだから、ブルータスの決心がつかないのが全く友情ゆえのものではないと言い切ってしまうわけには行かないだろうが、彼の独白が我々に内面を明かすためのものであるならば、むしろ彼を悩ませている問題は、ローマの民衆が彼の行為をどう受け止めるかということのようである。

…And since the quarrel

Will bear no colour for the thing he is,

Fashion it thus: that what he is, augmented,

Would run to these and the extremities.

And therefore think him as a serpent's egg

(Which, hatched, would as his kind grow mischievous)

And kill him in the shell. [II . i ,28 - 34]

彼はローマ市民を愛し、彼らのために、個人的恨みなどないシーザーを殺そうと思っている。しかし、それが彼らに理解されないようでは、それを行動に移すわけには行かないのである。たとえシーザーが戴冠したら暴君になることを自分自身は疑わなくても、そしてそうなる前にどうしても彼を殺してしまわなければならないとしか自分自身には考えられなくても、シーザーの凱旋に歓喜している民衆にとって、今のシーザーには殺すべき良い理由がない。ブルータスにとって問題なのは、シーザーの暗殺は彼らのためにしたことであり、陰謀はやむを得ない手段であったのだということを、どのようにして彼らに信じてもらうかということである。ローマに革命を約束した後の彼の関心は、陰謀と暗殺の悪辣さを覆い隠すことに集中する。陰謀を企んでいる者たちが訪れて来た時、陰謀は帽子や外套の襟などではなく愛想のよい微笑みで隠すのだと、彼はつぶやく。

…O then by day

Where wilt thou find a cavern dark enough

To mask thy monstrous visage? Seek none, conspiracy,
Hide it in smiles and affability,... [II . i ,79 - 82]

自分たちの行為の悪辣な面を覆い隠そうというブルータスのこういった一連の試みを論じているスターリングは、「彼は、初めは革命に加わる者として自分自身の内面で革命に苦しむが、そのあと、陰謀を憎み正直なやり方を好む者として、にこやかな礼儀正しさに身を隠すようにと、陰謀に呼びかけなくてはならないのだ」と説明している。⁴⁾ さらにブルータスは、陰謀に加わるときにも暗殺を生け贄の儀式になぞらえようとしているし（二幕一場 162-174行）、暗殺を終えたときでさえシーザーの遺体を聖者の遺品に喩えようとするなど（三幕一場 105-110行）、この暗殺の残虐さと罪深さを、他の暗殺者たちにも自分自身の良心に対しても、神聖な見せかけで覆い隠そうと虚しい努力を続けている。彼の考えは、「我々の心は、狡賢い主人がやるように、その召使である我々に暴力を奮わせておいて、後でそれを叱りつけるように見せかけよう」という彼の矛盾した台詞に最も明らかである。

And let our hearts, as subtle masters do,
Stir up their servants to an act of rage
And after seem to chide'em. This shall make
Our purpose necessary, and not envious;
Which so appearing to the common eyes,
We shall be called purgers, not murders. [II . i ,175 - 180]

この考えの矛盾は興味深いとスターリングも指摘しているが、⁵⁾ このような振りをするこ
とで、自分たちの目的が妬みに満ちたものではなく必要なものであり、自分たちは人殺し
ではなく世を正すものと思われるだろうというのは、いかにも苦しい身勝手な理屈である。
スターリングの言うように、「大体において個人的な目的が動機である陰謀に加わった非
個人的な一員として、彼は、その方法を非個人的なものにしたり儀式化することによって、
自分の矛盾を複雑に解決しよう」としているのである。⁶⁾ その目的が名誉なものであつて
も、暗殺を企むことの悪辣さを否定することまではブルータスにもできないようであるが、
それでも彼は、誰から見ても正しいと思えるクーデターを達成させたいのである。いずれ

にしても、彼の独白では、彼のシーザーへの友情はあまり感じられない。だから、「シーザーをより愛さなかったからではなく、ローマをより愛したからである」という彼の名演説が実のないもののように聞こえるのも、アントニーの感傷的な演説の方が真実味があるように聞こえるのも、民衆がブルータスの演説で一応納得はしても、アントニーの演説ですぐに気持ちを一変させてしまうのも、全く自然のことにように思われるのである。シェイクスピアのシーザー暗殺劇は、少なくともブルータスの友情と裏切りを主題として展開しているわけではないと言えるだろう。

ブルータスの暗殺の動機も、彼の決心を鈍らせている理由も、彼自身が感じているほど非個人的なものではないが、他の暗殺者たちのシーザーの戴冠に対する反感は全く個人的である。キャシアスは名誉の話だと言って、ブルータスをシーザー打倒に立ち上がらせるための話を始めるが、彼の言う名誉もローマ市民としての誇りも、シーザーの台頭を憎む理由も、その本質は、体力においても気力においても自分より優れていると思えぬ者に跪くことへの個人的嫌悪であり、そのような者が強大になり権力を一人占めすることに対する妬みであることが明かされる。彼とのかつての水泳の競争でシーザーが喫した惨めな敗北の話をしてから、彼は現在の自分の境遇を、そのシーザーが何気なく会釈してくれただけでも腰を屈めなければならない惨めな生き物だと話しているし、

... And this man

Is now become a god, and Cassius is

A wretched creature and must bend his body

If Caesar carelessly but nod on him. [I . ii ,115 - 118]

また、スペインでシーザーが熱を出して弱っていたときの様子を話して、そんな弱虫が「広大な世界の先頭に立って、一人で栄冠を手にするなんて驚きだ」と嘆いている。

...Ye gods, it doth amaze me

A man of such a feeble temper should

So get the start of the majestic world

And bear the palm alone. [I . ii ,128 - 131]

彼が憎み阻止しようと思うものは、単にローマの共和制が崩れ、そこに一人の王が君臨するということではなく、自分よりも優れているわけではない者がその地位に就くということである。おそらく彼は、話し始めたときは本当にブルータスの重んじている名誉に訴えるつもりでいたのに、話しているうちに、シーザーの人気と彼の手に入れようとしている権力に対する自分の気持ちを押しさえられなくなってしまったのだろう。彼を反逆に駆り立てているのは、君主制か共和制かという政治的な問題よりも、むしろ今のシーザーに対する彼の個人的な感情であることは否定できない。

キャシアスの台詞に明らかなシーザーの権力に対する反感と妬みに、シーザー自身に対する彼の個人的嫌悪を読み取ることもできるが、ブルータスを陰謀に誘うつもりで話しているのではないキャスカの台詞には、彼のシーザーに対する軽蔑と嫌悪があからさまに表現されている。シーザーに王冠が捧げられた時の様子を話してくれとブルータスに頼まれると、彼は「その時の様子を話すくらいなら首を吊られた方がまだ。全くの茶番で、満足に見てもいなかった」と前置きして話し始める。

I can as well be hanged as tell the manner of it. It was mere foolery,
I did not mark it. [I . ii ,233 - 234]

シーザーが民衆に向かって胸をはだけて、喉をかき斬るようにと差し出した時などは、自分が職人だったら絶対そうしてやっていたとさえ言っている。

Marry, before he fell down, when he perceived the common herd was glad he refused a crown, he plucked me ope his doublet and offered then his throat to cut. And I had been a man of any occupation, if I would not have taken him at a word I would I might go to hell among the rogues.

[I . ii ,256 - 260]

ここでの彼の台詞だけで彼の動機を判断するのは、もちろん彼に対して公正な見方をしていることにはならないが、彼がシーザーを嫌っていることはあまりにも明らかであるし、彼にもまた政治を論じている台詞がないので、彼が嫌悪以外の理由で陰謀に加わっていると考えるのは難しい。キャシアスにしても、シーザーに対して嫌悪を抱くどころか友情さ

え感じているブルータスを陰謀に誘おうとしているのでなかったら、もっとシーザーへの憎悪をむき出しにしたことだろう。ディシアスもシーザーが追従に弱く騙され易いことを馬鹿にしている（二幕一場 202-211行）。ブルータス以外の反逆者は皆、多かれ少なかれ何らかの形でシーザーに対する嫌悪や軽蔑を表現しているが、ローマ市民として共和制を愛するからシーザーを倒すのだという考えは、誰の口からも聞かれない。彼らは王になろうとしているのがシーザーだから殺すのである。シェイクスピアは、シーザーの暗殺劇を君主制と共和制の対立とか理想の政治体制というような政治的テーマで描いているのではないようである。

シーザーに対する反逆者たちの動機や心理を探ってみると、彼らの行動は必ずしも純粹で正しいものとは言いきれないことが分かるが、シェイクスピアはシーザー自身も、単に偉大な国民的英雄として描いているわけではない。この劇の幕開けは、かつてポンペイの凱旋に歓喜したのと同じように彼の凱旋を祝う民衆を、ポンペイ派の二人の護民官が叱りつける場面であり、シーザーに対する民衆の半ば盲目的な人気と不満分子の強い反感が早くも描かれている。この作品を書くに当たってシェイクスピアが基づいたプルタークの『英雄伝』では、シーザーは異国を滅ぼしたのではなくローマで最も偉大な人物の息子を殺したので、民衆は彼の勝利を喜ばなかったのであるが、⁷⁾ この民衆は、凱旋帰国するのがポンペイであろうとシーザーであろうと、またその勝利が敵国に対してのものでであろうと、かつて自分たちがその凱旋に歓声を送った英雄に対してのものでであろうと、同じように祝うようである。

... Many a time and oft

Have you climbed up to walls and battlements,
To towers and windows, yea, to chimney tops,
Your infants in your arms, and there have sat
The livelong day, with patient expectation,
To see great Pompey pass the streets of Rome.

....

And do you now strew flowers in his way,
That comes in triumph over Pompey's blood? [I . i ,36 - 50]

また、シーザーの翼に生えかかっている羽を今のうちにむしり取っておかないと、「目の届かないところまで舞い上がって、我々を奴隷の恐怖に陥れるだろう」という護民官のひとりフレイヴィアスの懸念は、卵から孵って有害な牙が生える前に殺してしまわないと、憐れみの情を持たない暴君になるに違いないというブルータスの考えと同質のものである。

These growing feathers plucked from Caesar's wing
Will make him fly an ordinary pitch,
Who else would soar above the view of men
And keep us all in servile fearfulness. [I . i ,71 - 74]

次の場面で実際に登場するシーザーの姿は、事実上政権を手にした者らしい堂々たるものである。ほんの二十数行の短い登場であるが、シーザー自身の態度にも彼に従う者たちの態度にも、今の彼の権力の絶大さが十分表れている。

When Caesar says, 'Do This', it is performed. [I . ii ,10]

彼を嫌っているはずのキャスカも暗殺の陰謀を企むキャシアスさえも、彼の前では従順に従うだけである。シーザーが妻をひと言呼んだだけでも、キャスカは民衆の歓声を静めようとしている。

Peaco ho, Caesar speaks. [I . ii ,1]

三月十五日に気を付けるようにという占い師の忠告もわざわざ退けて、彼は自分の勇気を民衆に誇示している。

ところが、そのあとシーザーの一行が去った後も舞台に残るブルータスに話しかけるキャシアスが、その話の中で語るシーザーの二つのエピソードは、このようなローマの英雄にはふさわしからぬものである。この、冬の荒れ狂うタイバー川でキャシアスに競泳を挑んでおきながら、溺れかけて彼に助けを求めた話と、スペインで熱を出したときは女の子のように震えながら飲み薬を欲しがったという話は、どちらもシェイクスピアの創作である。『英雄伝』では、シーザーの水泳における豪胆さが称えられているし、⁸⁾ 病気のと

きの彼のスペインの戦場での戦いぶりなどは、「病気に屈して、それを身を守るための上着にするようなことはせず、それどころか、戦いの苦勞を病気を治す薬にして、常に病気と戦い、旅を続け、」いつも戦場に出ていたと描写されている。⁹⁾ シーザーの健康上の弱さについては『英雄伝』でも触れられているが、シェイクスピアは初めにそれをこのようなエピソードで紹介している。どんな英雄にもこれくらいのエピソードはいくつかあってむしろ当然であろうが、ここで強調されるのは、先ほどの登場のときのシーザーの威厳との対比であり、その威厳の空威張りの面である。民衆の前でのシーザーの姿は実に堂々たるものであるが、実はそれ程勇猛な人物ではないような印象を我々は受ける。

そして、そこに再び登場するシーザーの姿には、先ほど退場したときの威厳が幾分失われている。堂々とした態度ではなく、何やら不機嫌な様子で登場するのである。彼は、ここでキャシアスに対して抱いている不安を傍らにいるアントニーに打ち明けるのだが、その様子は、彼自身が見せかけたいような単に洞察力の優れた者というよりも、むしろその洞察力ゆえに不安を抱かずにはいられないのだが、自尊心があまりにも強過ぎて恐れている様子などとても他人には見せられない男のようである。

I rather tell thee what is to be feared

Than what I fear: for always I am Caesar. [I . ii ,211 - 212]

シーザーが不機嫌になった理由は、ブルータスに尋ねられてキャスカが説明するが、シェイクスピアは、ここでも『英雄伝』にはないエピソードを付け加えている。彼が王になることを民衆が望んでいないことが分かると、ブルータスのシーザーは、椅子から立ち上がり、差し出された王冠をキャピトルへ持って行ってしまえと命ずるのだが、¹⁰⁾ シェイクスピアのシーザーは、持病の癲癇の発作で気絶してしまうのである。民衆の前では装っていなければならない威厳もここでは失われてしまう。自分に野心があるようならかき切るようにとなんとか喉を差し出しはするが、結局は奇妙な言動を病気のせいにして同情されている。キャシアスにしてもキャスカにしても、シーザーには強い反感を持っているので、彼の汚点になるような話には当然十分な誇張があるのだろうが、ここに描かれているシーザーの姿は偉大な英雄のものとは言い難い。不屈の精神と肉体を持った巨人ではなく、傲慢で自尊心は強いが、時には不安も抱くし病気持ちでもある等身大の男である。

次にシェイクスピアは、運命の日を迎えた自宅にシーザーを登場させる。前の場面での

ブルータスとポーシアの会話に引き続いて、我々はここで家庭でのシーザーを見るのである。L.C.ナイツも指摘しているように、この作品は公的事件を扱った劇でありながら、私的、個人的、家庭的役割での人物たちの姿が何度も描かれている。¹¹⁾ブルータスは、初めは妻の懇願にもかかわらず口を閉ざし続けるのだが、彼女が自らにつけた傷を目にすると、シーザー暗殺の陰謀の話も打ち明けられないわけには行かなくなってしまう。そしてシーザーもまた、初めは民衆の前にいるときのように、死も前兆も悪夢の警告も、自ら命じた占いさえも少しも恐れず元老院に出かけようとするが、彼のことをよく理解しているように思われるキャルパーニアの懇願で思い止まる。

Alas, my lord,

Your wisdom is consumed in confidence.

Do not go forth today. Call it my fear

That keeps you in the house, and not your own. [II . ii ,48 - 51]

ブルータスもシーザーも、家では人並みの情を持つ普通の夫として描かれている。

それでもシーザーが出かけて行くのは、もちろん一つには、彼が王冠を欲しがっていることと追従に弱いことをうまく利用したディシアスの巧みな説得によるものだが、彼の決意を決定的にするのは、自分が信頼している者たちに家まで迎えに来られたことであろう。彼は、彼らを疑いもせず一人一人心から歓迎し、友人らしく一緒に出かけることを望んでいる。

Good friends, go in and taste some wine with me,

And we, like friends, will straightway go together. [II . ii ,126 - 127]

友人たちと共に元老院に向かっていると思込んでいるため、彼自身に深く関わる訴えだから読んで欲しいというアーテミドーラスの訴えも、彼は、自分に関わることは最後でいいと言って退けてしまう。

What touches us ourself shall be last served. [III . i ,8]

幕開けから暗殺の直前まで、占い師やキャルパーニアやアーテミドラスが陰謀の成功を危うくするにもかかわらず、シーザーが運命の日に元老院に赴くのは、彼の野心と虚栄心と、ブルータスら陰謀家たちの追従を見抜けない彼の甘さのためである。シェイクスピアは、シーザーが暗殺されるまで、彼の人間性、とりわけその滑稽とも言える程の人間的な弱さや甘さを、様々な角度から十分に描いている。

シーザーの暗殺に関しては、シェイクスピアはあまり肯定的な態度を取っていないようである。たとえシーザーが、水泳ではキャシアスに及ばず、熱を出せば女の子のように震えながら飲み薬を欲しがるといふような者でありながら、人前ではあたかも自分が神に最も近い存在であるかのように振る舞ってしようとも、王になりたいという野心を抱きながらも、ローマの民衆がそれを望んでいないことが分かると、アントニーの差し出す作り物の王冠に手を伸ばすことも出来ずに持病の癲癇で気絶してしまうような男であろうとも、あるいはブルータスやフレイヴィアスの言うように、王になれば暴君になる可能性を秘めていようとも、シーザーの暗殺を十分に正当化することはできない。いかなる者もローマに君臨してはならないという暗殺者たちの共和主義が正しいものだとしても、シーザーが非情な暴君になるといふブルータスの動機はあまりにも独断的すぎるし、他の者たちの動機は、どちらかと言えば嫌いな者が王になろうとしているから殺すという個人的なもののようなものである。ブルータスが動機や手段を神聖化しようとするほど、我々には、逆にその正当性が疑わしいもののように思えてくる。「シーザーに関しては実のところ、これまでは理性よりも感情のほうが勝っているところを見たことがない」といふブルータスの独白から判断すると、シーザーは国家元首としてもそれ程ふさわしからぬ人物ではないようである。

...And to speak truth of Caear,

I have not known when his affections swayed

More than his reason. [II . i ,19- 21]

実際、シーザーが本当にこのような人物であることは、暗殺される直前の彼の姿にも見ることができる。追放された兄の赦免をメテラス・シンパーが請うが、シーザーは、普通の人間が心を動かされるように、身を屈め頭を下げて丁寧な言葉で頼まれても、自分は「法で厳然と定められたことを子供の法律にしてしまう」ようなことはしないと断り、願いを退ける。

These couchings and these lowly courtesies
Might fire the blood of ordinary men
And turn preordinance and first decree
Into the law of children. Be not fond
To think that Caesar bears such rebel blood
That will be thawed from the true quality
With that which melteth fools – I mean sweet words,
Low-crookèd curtsies, and base spaniel fawning.
Thy brother by decree is banished: ... [III . i ,36 -44]

さらにブルータスやキャシアスにまで願い出られると、彼は自分の存在を北極星に喩えて、その考えの揺るがないことを示そうとする。

If I could pray to move, prayers would move me.
But I am constant as the northern star,
Of whose true-fixed and resting quality
There is no fellow in the firmament. [III . i ,59 -62]

しかしながら、この場のシーザーの態度は二つの点で批判されている。一つは、すぐ前の場面で、彼は元老院に出掛けるか否かで二度も決心を変えているのに、ここで自分の決心の堅さを北極星の位置にまで喩えるというのは、いかにも一貫性がないということである。妻に心配されても、彼は、シーザーには恐れるものなど何もないと言って出掛けると言い張るのだが、あまり熱心に頼まれると行くのを思い止まる。そこへディシアスが来て、カルパーニアの悪夢の意味を巧みに解釈し直し、しかも王冠のことまで仄めかされると、彼はまたすぐに決心を変えてしまうのである。それでいながら、臆病者と違って勇者は一度しか死の恐怖を味わわないとか、自分は危険よりも危険な危険の双子の兄であるとか、世界でただ一人決心を揺るがせてはならないのが自分であるなどと言うのは、確かに豪語し過ぎである。シーザーに対して好意的でないドーヴァー・ウィルソンは、彼のこういった空威張りの面を批判的に捉えているが、¹²⁾ 実際は、ミュアの言うように、こ

ういった状況ではシーザーがしたように振舞わないことの方が難しいだろう。¹³⁾ 妻の懇願で思い止まりはしても、自分の野心が満たされる可能性が仄めかされた上に仲間たちに迎えに来られたのでは、妻の悪夢くらいで行かないわけには行かないのが普通である。それにしてもシーザーが豪語し過ぎていることは否めないが、家庭での態度と政治を行うときの態度が同じでなければならないということはないだろう。普段は柔軟な対応をしてみようこともあるからといって、職務を遂行するとき厳格であろうとすることが非難すべき欠点になるとは思えない。

もう一つは、ここでのシーザーの態度に、無慈悲で融通の利かない暴君のような感じがする点である。我々はここで、「権力の弊害は、それが力から憐れみの心を奪うことである」というブルータスの独白を思い出す。

Th'abuse of greatness is when it disjoins

Remorse from power. [I . iii ,18 -19]

ドーヴァー・ウィルソンとは対照的に、シェイクスピアはブルータスよりもシーザーを好意的に描いているという見方をするドーシュでさえ、「暗殺に至る七十行くらいの間に、シェイクスピアはわざと、我々がそれまで彼のシーザーに寄せてきた同情と賞賛を失わせて」、暗殺の場面でも我々の同情のバランスが保たれるようにしていると言っている。¹⁴⁾ しかしながら、このシンパーの赦免の訴えは、ミュアの言うように、「暗殺者たちが獲物に近づくための弁解として用い」たものであるから、これを「シーザーに慈悲が欠けている証拠と見なすわけには行かない。」¹⁵⁾ 暗殺の場面の直前に、夫の身を心配するあまり動揺したポーシアが、人に聞かれてはならないはずの独り言を漏らしている。

...Brutas hath a suit

That Caesar will not grant.... [II . iv ,42 - 43]

おそらく、ブルータスは暗殺の手順まで妻に打ち明けたのだろう。陰謀家たちの訴えは、明らかにシーザーが認めるはずがないことを前提としたものであり、我々は、このことでシーザーの慈悲を問うべきではない。実際には、我々の注意は劇の進展の作り出す緊張に奪われているため、舞台ではこういった事情よりもシーザーの過度に横柄な態度のほうが

気になり、ドーシュの言うように、我々の同情は一時的にシーザーから離れるだろうが、それでも、暗殺に対するシェイクスピアの態度は、やはり否定的である。

シーザーの暗殺をシェイクスピアが肯定的に描いていないことは、彼がこの劇を反逆者たちの勝利で終わらせていないことに最も明らかである。モウルトンの言うように、ブルータスたちが勝利の叫び声を上げているときにアントニーの召使が入ってくることで、芝居の進展が一変する。¹⁶⁾ 劇の雰囲気も登場人物たちの様子も、ここでもがらりと変わってしまうのである。それまでは酒好きの遊び人で影の薄かったアントニーが、まるでシーザーの死で酔いから覚めたかのように、急にその能力を発揮し始め、状況を把握しながら目的を持って成り行きの方を変えて行き、逆に、それまでシーザーを倒すことだけを考えてきた暗殺者たちは、アントニーの演説で民衆の共感を失うと、目的を見失ってしまう。アントニーには活力がみなぎり、ブルータスとキャシアスには哀愁が漂い始める。我々の関心は、前半は陰謀の成り行きとその成否に集中していたが、後半では二人の暗殺者の悲劇的な運命に集中する。けれども、それで全く別の種類の作品になってしまうわけではない。L.C. ナイツが後半の二幕半で起こることは全て、前半の陰謀の中で暗示されていたことの自然な結果であると言っているように、¹⁷⁾ 後半のブルータスとキャシアスの悲劇は、前半で描かれているような形でシーザーを暗殺した者たちの辿る自然な道である。我々の注意は後半はこの二人の悲劇に引きつけられているが、そこで描かれているのは、陰謀を企んでいるときに彼らが抱いていた幻想が次々に壊されていく過程である。

その最初のものは、言うまでもなくアントニーの扇動である。「人の行動を見抜く」とシーザーに警戒心を抱かせたキャシアスだけは再三注意を促しているが、ブルータスたちには、アントニーがただの酒好きの遊び人以上の者とは思えず、彼に対して用心する気など全くない。

If he love Caesar, all that he can do
Is to himself—take thought and die for Caesar;
And that were nuch he should, for he is given
To sports, to wildness, and much company. [II .i, 186 - 189]

また、ブルータスはアントニーを甘く見ているだけでなく、自分たちの正義と自分自身の演説の力を過信しているため、アントニーに演説させることをキャシアスに止められても

自分が先に演説を行い、シーザーを殺した理由を説明すれば、必ず民衆の共感を得ることができると信じている。

I will myself into the pulpit first

And show the reason of our Caesar's death. [III.i, 234 - 235]

ところが、アントニーはシーザーの死体を前にして復讐を誓い、ブルータスの簡潔で論理的な演説よりも感傷的で具体的で、しかも巧妙な演説を行い、民衆をシーザーの復讐へと煽りたて、その結果、「世を正す者たち」であったはずの彼ら暗殺者たちは、「気違いのように馬を飛ばして」ローマから逃げ去らなくてはならなくなる。

I heard him say Brutus and Cassius

Are rid like madmen through the gates of Rome. [III.ii, 258 - 259]

演説では、彼がシーザーに行っただけのことは民衆が彼に行っても構わない行為であると語り、また、ローマが彼の死を必要とするときには、シーザーを刺したのと「同じ剣を自らに突きつけるであろう」と言って喝采を浴び、アントニーに演壇を譲って退場したブルータスではあったが、自分たちに対する民衆の突然の怒りは、彼にとって、まさに青天の霹靂であったに違いない。

I have done no more to Caesar than you shall do to Brutus. [III.ii,31 - 32]

...With this I depart: that, as I slew my best lover for the good of Rome, I have the same dagger for myself when it shall please my country to need my death. [III.ii,37 - 39]

次に、ローマを追われたブルータスの高潔さが行き詰まる。正義感の強い彼は、いかなる場合にも自分が賄賂を受け取ることができないのはもちろんのこと、陰謀の仲間でもあり義理の弟でもあるキャシアスがサーディス人から賄賂を受け取っていることを非難せずにはいられない。しかも、それでいながら自分自身兵士たちに支払う金に困窮すると、彼

にはキャッシュに金の工面を頼むしかないのである。

... I did send to you

For certain sums of gold, which you denied me,

For I can raise no money by vile means. [IV.iii,69 - 71]

ブルータスは、彼自身が非難している方法で金を手に入れてくれとキャッシュに頼んでいるのであり、それを断られたと言って怒っているのである。我々は彼の身勝手さを感じないわけには行かない。この口論の場面では、ポーシアが死んだこともあって、ブルータスの感情があまりにも乱れ高ぶっているため、彼の正義と公明正大さの最も独善的な面があらさまに表現されている。

キャッシュもまた、ブルータスを陰謀の指導者にしたため、シーザー暗殺の決心を誓おうと提案したとき以来、思わぬ苦難を強いられている。彼は、決心を誓い合おうという提案もアントニーも殺そうという提案も、アントニーに演説させるのは危険であるという助言も皆ブルータスに退けられて、彼と共にローマを追われたのである。そしてまた、アントニーとオクティヴィアスの軍をサーディスで迎え撃つかフィリパイに進撃するか議論でも、ブルータスに強く反対することもせずに、不本意ながらも全てをその一戦に賭けなければならなくなる。

...Give me thy hand, Messala.

Be thou my witness that against my will

(As Pompey was) am I compelled to set

Upon one battle all our liberties. [V.i,72 - 75]

そしてフィリパイでは、ブルータスが号令を早く出し過ぎたため、彼は敗北を余儀なくされるのである。ある意味では、彼の破滅は全て、彼が指導者に選んだブルータスの判断の誤りがもたらしたものだと言うこともできる。

O Cassius, Brutus gave the word too early,

Who, having some advantage on Octavius,
Took it too eagerly. His soldiers fell to spoil
Whilst we by Antony are all enclosed. [V.iii, 5-8]

一方、最後の決戦を目前にしたブルータスのもとには、できることならシーザーの肉体を傷つけるよりも葬り去りたかったシーザーの精神が、亡霊となって二度も現れる。彼のような理想主義者にとって、これ程の皮肉はないだろう。シェイクスピアは、シーザーばかりでなく彼の暗殺者たちの人間的な弱さや甘さも、その名誉を重んじるローマ人らしい精神的な強さと共に十分に描いているのである。

その名が題名になっているにもかかわらず、シーザーの登場するのは十六場面中たったの三場面しかないのだが、我々は様々な形でこの人物について知らされる。彼は一幕二場で初めてその民衆の前での堂々たる姿を舞台に現し、すぐに立ち去るのだが、舞台では、民衆がシーザーに送っていると思われる歓声を背景に、陰謀に誘おうとしてキャシアスがブルータスにかつてのシーザーの話をする。そしてすぐに、民衆の前で威厳を保てなくて不機嫌になっているシーザーが再び登場し、洞察力と不安と自尊心を感じさせる台詞をアントニーに漏らして退場するが、キャスカが民衆の歓声とシーザーの不機嫌の理由を説明する。次には家で妻の頼みを聞く姿が描かれ、最後は元老院で職務を遂行している姿と、信じている者たちに裏切られて死んで行く姿が描かれている。特に彼の汚点となるような話は、彼に強い反感を抱いているキャシアスやキャスカが話すので、非常に鮮明で力強い描写になっている。我々は様々な状況でのシーザーの言葉と行動、感情と表情を十分に見たり思い描いたりすることができ、この古代ローマの偉大な英雄の姿がとても身近に感じられ、彼が暗殺されてからも、アントニーの演説やブルータスとキャシアスの口論などで、我々は最後まで、彼の偉大さや暗殺の是非に関する疑問を登場人物たちと共に感じ続けることができるのである。

また、ブルータスを初めシーザーに対して陰謀を企む者たちの行動も、その動機が必ずしも公正なものではなく、それぞれに独断的な考えや個人的な感情に基づいたものであることが彼らの独白や会話で十分に説明されているため、非常に理解しやすく共感できるものとなっている。ヴァン・ドーレンは、その言葉使いの演説者のような簡潔さと有効さゆえに、この作品の全ての登場人物に「大理石の像のような明瞭さと単純さがある」と言っ

ているが、¹⁸⁾ それでも彼らは、決して我々の目に大理石の像のように映らない。シェイクスピアの最大の関心は、我々が大理石の像としてのイメージしか持っていないこれら古代ローマの英雄たちを、生きている人間として舞台上で活躍させることであつたに違いない。これまで多くの批評家に論じられてきたように、彼らは皆、確かに古代ローマ人の価値観を持ち、古代ローマ人らしく振舞い、古代ローマ人らしく簡潔で有効な話し方をしているが、彼らの持っている弱さや欠点、彼らを動かしている感情などは、どれを取ってみても、エリザベス朝のロンドンの人々にも現代の我々にもありがちなものばかりである。シェイクスピアはここに登場する人物たちを、単なる政治の典型や歴史上の人物として描いていない。彼がこの歴史上あまりにも有名な大事件に求めたのは、題材に過ぎない。この作品は、劇作の過程で幾らかの変更はあるにせよ、大筋ではプルタークの『英雄伝』を、筋ばかりでなく表現までもほぼ正確に、散文で書かれた物語を韻文の劇に書き変えているのであるが、そこに描かれているのは人類普遍の人間模様であり、登場する人物たちは、人並の弱さや甘さや情を持った、我々と同じ生身の愛すべき英雄たちである。

注)

- 1) John Dover Wilson ed. *Julius Caesar* (Cambridge U.P., 1949) p. xxi.
彼は、この劇のテーマは共和制と君主制の対立であるという見方をしている。
- 2) Marvin Spevach ed. *Julius Caesar* (Cambridge U.P., 1988)
本文中の作品からの引用及びその行数は、全てこの版のものである。
- 3) George Wilson Knight, *The Wheel of Fire* (Oxford U.P., 1930) pp. 121 - 122.
- 4) Brents Stirling, *Unity in Shakespearian Tragedy* (Columbia U.P., 1956) p. 46.
- 5) *ibid.*, p. 47.
- 6) *ibid.*, pp. 53 - 54.
- 7) Geoffrey Bullough ed., *Narrative and Dramatic Sources of Shakespeare* vol. V (Columbia U.P., 1964) p. 77.
- 8) *ibid.*, pp. 74 - 75.
- 9) *ibid.*, p. 66.
- 10) *ibid.*, p. 81.
- 11) L.C. Knights, 'Personality and Politics in *Julius Caesar*', *Further Explorations*

(Stanford U.P., 1965), pp.36 - 37.

12) *Julius Caesar*, p.xxv.

13) Kenneth Muir, *Shakespeare's Tragic Sequence* (Hutchinson Univ.Library, 1972) p.50.

14) T.S.Dorsch ed., *Julius Caesar* (Methuen,1955) p.xxxv.

15) *Shakespeare's Tragic Sequence*, p.45.

16) R.G.Moulton (from *Shakespeare as a Dramatic Artist*,1885), Peter Ure ed., *Casebook Sries:Julius Caesar* (Macmillan,1969) p.36.

17) *Further Explorations*, p.34.

18) Mark Van Doren, *Shakespeare* (New York,1939) pp.180 - 181.